

再生短信

大地のメッセージ

大地の芸術祭2018 飯舘村・再生の会視察団同行記



13



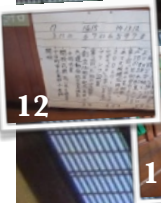
1



2



3



12



11



10



北川フラム

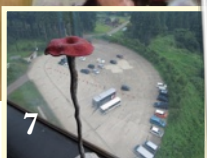
廃校の年残っていたのはユウキ、ケンタ、ユカの三人でした。今も廊下に残して貼ってある、子どもたちが書いた真田小学校の歴史年表(写真12)を見ると、目頭が熱くなるのは、2000年第1回の芸術祭、2003年第2回の芸術祭など、この学校の生徒たちに与えた芸術祭の楽しさです(写真10～11)。(北川フラム『ひらく美術一地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房、2015年)



8



9



7



6



4



5

【カット写真】1～3.「ポチョムキン」。カサグランデ&リンターラ建築事務所(フィンランド)作。4～5.エマ・マリグ(チリ)作「アトラスの哀歌」。中条・高麗神社拝殿。6～7.「越後松之山「森の学校」キョロ口」。手塚貴晴+由比作。8～9. KIGI作「スタンディング酒BAR 酔独楽・よいごま」。10～12.「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」。田島征三作。年表に廃校の年を刻む元真田小学校。13.「棚田」。棚田がそのまま自然の画布となる。イリヤ&エミリア・カバコフ(ロシア)作。【背景写真】「うぶすなの家」。茅葺き民家を「やきもの」で再生。展示と食事の一体化、食器も全て作品、二階に三つの茶室。入澤美時、安藤邦廣作。

2018年8月30/31日、記者はく大地の芸術祭/越後妻有アートトリエンナーレ2018>視察団に同行した。今回の視察は再生の会が企画し飯舘村との協働により実現した。視察は芸術祭の総合ディレクター・北川フラムさん自身による案内と説明により進行、菅野典雄村長は31日に合流し十日町市と津南町の関係機関と交流懇

談。3年毎に開催されるアートトリエンナーレは2000年に始まり今年7月29日～9月17日、世界から50万人の参観者を集めた。ガイドマップに掲載されている作家だけで三百人以上。
ポチョムキンの赤錆びた鉄塊は近代文明の無念を象徴しながら、自然に内包される人間の姿を静かに問う。ふと目を彼方にやると信濃川の対岸

には大地の生命の証し・一筋の滝を望む。アトラスの哀歌の作者は神社の拝殿を創作の場とした。ありがたみが込み上げてくる作品だ。寺社が多いのは人の往来交流が盛んな証し、ながいあいだの自然とのかかわりあいでも生まれた「里山」に集約される世界にアートが寄りそう、フラムさんのことばである。
(撮影・文責：若林一平)